

.....編集後記.....

◆本号は、本文中に述べられているように、一昨年のポツダム国際会議とそれを受けての国際陸上科学掘削計画 (ICDP) 設立準備等の歩み、日本における陸上深層科学掘削への期待や課題などを中心に特集したものです。立案は当所の伊藤久男氏と浦辺徹郎氏によりました。

◆本特集には多方面の様々な方々に執筆していただきました。お忙しい中を早くから原稿を提出していただいたのにもかかわらず、種々の事情により発行が遅れたことをお詫びします。特集号の編集という困難さもあるが、発行の遅れはひとえに編集者の責任であると自覚しています。また、星野一男氏からも貴重な原稿をいただいたが、編集の都合上見送らざるを得なかったこともあわせてお詫びします。

◆超深度掘削については1989年7月号でも「超深度試錐」として特集しました。当時は(西)ドイツの大陸深部掘削計画 (KTB) によるパイロットボーリングが進行中で、その深度が4,000 m の段階でした。すでに地温勾配が予想より高いことや、水平に近いと考えられていた地層が大変急傾斜なことなど、事前調査からのずれが判明しています。

◆深部掘削は、よく天文・宇宙科学における望遠鏡に例えられます。しかし、私には宇宙ロケット(飛翔体)と言った方が比喩的にも実態的にもよりふさわしいように思えます。地球内部に対する望遠鏡としての役割は弾性波、電場・磁場等観測が担っています。飛翔体は地面を離れて未知の空間へ私達を導

きます。その軌跡は空間を埋めつくすことは出来ませんが、新たな領域を一つ一つ切り開きます。

◆飛翔体が技術の総合により製作され、運航されるように、掘削も統合された技術作品です。深層掘削には従来技術のみならず新たな技術開発が必要でしょう。深くなるほどシステムとしての掘削が要求されることでしょう。そして、目的地を決定するのは科学的課題です。

◆さらに飛翔体が人工衛星や宇宙実験室を目的の空間へ運び込むことが出来るように、掘削は地球内部へ観測・実験室を用意することが出来ます。ハッブル望遠鏡が威力を発揮しているように、掘削坑は地表で行われている観測項目に対してもよりよい場を提供します。バン・アレン帯や地球磁気圏等の姿がその場で捉えられたように、地殻内部の応力場や流体の存在形態に関する情報などがその場で得られるでしょう。

◆ハッブル望遠鏡の構想は60年代のアポロ計画と同じくらい古いものだと言うことです。深層科学掘削のアイデアも昔からあがっています。しかし、その実現はハッブル望遠鏡と同じく新しいものだと思います。

◆今号から編集委員長が交替しました。前小玉委員長は地質部長へ移動となり、新たに首席研究官となった加藤碩一が委員長を引き継ぐこととなりました。(宮崎光旗 記)

[訂正] 1995年3月号目次中「石油生成とビトリナイト反射率のカイネティックモデル」の著者は鈴木徳行・松林秀樹の2名で、松林氏の名前が抜けていました。おわびして訂正いたします。

地質ニュース編集委員会

委員長: 加藤碩一

副委員長: 佐藤興平

幹事: 宮崎光旗・奥村公男・石井武政

委員: 今井 登・岡村行信・杉原光彦・内田利弘・

野田徹郎・吉井守正・豊 遙秋・佐藤岱生

顧問: 林 暉・石原舜三・大嶋和雄・高橋 博

事務局: 総務部業務課広報係 (山崎 浩・清水真寿美)

〒305 つくば市東1-1-3 地質調査所

地質ニュース編集委員会

事務局 Tel. 0298-54-3520

Fax. 0298-54-3533

地質ニュースに対するご意見は編集委員会へ

| | |
|--------------|------------------------------------|
| 地 質 ニ ュ ー ス | 第488号 1995年 4 月号 定価 ¥ 770 千 実 費 |
| 1995年4月1日 発行 | |
| 編 集 | 工業技術院地質調査所 |
| 発 行 人 | 株式会社 実業公報社 |
| | 代表者 林 光生 |
| 発 行 所 | 株式会社 実業公報社 |
| | 東京都千代田区九段北1の7の8 |
| | Tel. (03)3265-0951 (代表) 千 102 |
| | 振替口座 00110-6-32466 |
| | 麹町局私書箱第21号 |
| 印 刷 | 小宮山印刷工業株式会社 |

©1995 Geological Survey of Japan

●本誌は東京都の霞が関政府刊行物サービスセンター、八重洲ブックセンター(株)本店およびつくば市の友朋堂書店本店に常備してあります。品切れの際は店頭で注文してください。